

開化式

映画文学人生論

0111) 当世書生気質 坪内逍遙 参考：二葉亭四迷 浮雲
012)1 たけくらべ 樋口一葉 参考：にぎりえ
013)1 欺かざるの記 国木田独歩 参考：武蔵野
014)1 勝利の悲哀 徳富蘆花 参考：不如帰
015)1 東京の三十年 田山花袋 参考：蒲団
参考：夏目漱石『近代日本の開化』

できるだけ神経衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して行くが好かろう

二年前に読んだ開化篇の五篇はいささか消化不良気味の自覚があり、もつとなんとかならないかと思いつながら、次の五篇を読んだ。

坪内逍遙『当世書生気質』

樋口一葉『たけくらべ』

国木田独歩『欺かざるの記』

徳富蘆花『勝利の悲哀』

田山花袋『東京の三十年』

署名を知っているだけで、カビが生えたような古めかしい作品ばかりだが、読んでみると意外に面白い発見がある。やはり先入観による読まず嫌いですませてはいけなと思った。

夏目漱石は 西洋の開化が内発的であるのに対して、（黒船来航による）日本の現代の開化は外発的であるとし、「できるだけ神経衰弱に罹（か）か）らない程度において、内発的に変化して行くが好かろう」と述べたことがある。

ここにあげた五篇のような古めかしい作品を今どき読むことも、内発的開化のためには効果があるかもしれない。

『当世書生気質』は、勸善懲悪を否定し、人情や世態風俗の写実を主張する逍遙の文学論『小説神髓』の応用篇だが、結末は勸善懲悪のハッピー



開化式

映画文学人生論

エンドになっている。言文一致の文体でもない。日本初の近代小説の座を二葉亭四迷『浮雲』に譲らざるをえなくなったのも無理はない。

ところが、私はなぜか『浮雲』よりも『当世書生気質』のほうが面白いと思ってしまった。当時の世態風俗からは書生と芸妓の恋は不自然ではないし、戯作の要素も気にならない。違うのは『浮雲』の主人が無用の人で、余計者の意識が強いのに対し、書生には立身出世の意識がある点だ。

樋口一葉の雅俗折衷文体小説は、二年前『にごりえ』がほとんど読解できなかつたが、『たけくらべ』はかなり理解できた。これは尾崎紅葉『金色夜叉』、幸田露伴『五重塔』、坪内逍遙『当世書生気質』を読破して、私の言語脳が文語体すこしなじんできたためだろう。

『欺かざるの記』は『武蔵野』の背景を理解する上で参考になった。『武蔵野』には佐々城信子は登場しないが、国木田独歩の信子への想いが行間にこもっている。『東京の三十年』によれば、独歩が武蔵野の渋谷村にいたころ、田山花袋が訪れ、親交がはじまった。『武蔵野』は花袋の『蒲団』や有島武郎の『或る女』とつながっている。『勝利の悲哀』——戦争に勝って、国民が戦勝に酔っている時は、水をさして愚民の頭を冷やすことも内発的開化作家のつとめかもしれない。

春や昔十五万石の城下かな 正岡子規